

明治期、飯田下伊那の文壇は、広く上伊那の作者や作品も受け入れていた。次はその一例で、「栄華の墳墓」と題する新体詩である。とても長い詩なので、紙面の都合上その一部のみを紹介する。

引用部分は、私たちが『平家物語』や『源平盛衰記』でよく知る、平敦盛や那須与一の関係場面である。以下、いずれの場面もこうした調子で、臨場感と緊張感に満ちた表現になっている。

箕輪町)の人で、文化人を多く輩出した家系に育ち、早稲田大学に学んだ。文才が豊かで、詩に秀で、歌を与謝野鉄幹に学ぶ傍ら、若山牧水等とも交友が篤かった。後に、推されて

村長も歴任した。八浪(夕月夜)と下伊那との接点は、妹の澄尾(澄子)が近藤政寛(赤嶺)の夫人だったことが大きい。従って、この詩の前文には赤嶺が「詩友八浪兄：我南信詩壇、行く春の

寂寥を破るに値す。」と記し、跋文には八浪自身が「畏友近藤赤嶺の君が、信南の行く春を少しは慰むべきこともやと言はる、ままに寄す。」と書いている。最初は、一の谷の戦

で、平敦盛が熊谷直実に討たれる場面である。浮かび出でたる一葉舟

坂東声の音は太く手招く方をほ、えみて今し戻れる沖の武者連銭鞆毛駒若くかざす錦の直垂にかほる眉黒、玉の顔泣いて散らせる花一枝鬼神も嘆け武士が屍にそへし一管の

目を染めなせる小扇を舳先に立て、さし招く人、紅の五つがさね花の姿の艶なるや心ぞ憎し敵のさまいで、わが射なむやうを見よ駒徐に乗り入る、

声に出して読みたい郷土の近代文学(六)

鎌倉貞男

容、清げの武者一騎
滋藤の弓、白羽の矢
響く矢鳴りに的のくだけ
散るは紅葉か龍田川
舞ふは吉野の花吹雪
なりをしづめし両陣の
歓呼の声は天の楽

右は長篇の叙事詩で、それぞれ複数の連を持つ六つのまとまりから成り立っている。詩は、各連十行で構成され、全部で三十七連

ある七五調の文語定型詩である。

作品は、放浪の遊子が平氏と源氏の夢の跡を懐古する体裁をとりながら、平家一門の盛衰を詩情豊かに歌いあげている。特色は、美辞麗句はを多用し、比喩や対句・体言止めや擬人法等、あらゆる修辭法を駆使して、壮大で絢爛たる長篇詩となっていることである。(故人敬称略)



矢島敏弼(『上伊那郡誌』より)